

三重ノリ生産・販売体制構築事業（Ⅰ）

黒ノリ生産体制の構築

岩出将英・勝田孝司・倉田恵吉

目的

近年、ノリ生産者および業界からは、とりわけ地先の漁場環境に適応した優良品種の作出を望む声が多くなっている。本事業では、黒ノリ養殖の生産性の向上と経営の安定化を目的とし、漁場環境に適応した新品種の作出に取り組んだ。

方法

1 漁場環境適応品種の作出

1) 低比重耐性品種の養殖試験

葉体短縮被害の発生している漁場より採集された葉状体を用いて、低比重耐性を指標として室内選抜によって得られた株（以下、K1）の養殖試験を実施した。試験には伊曾島漁業協同組合（桑名市）の陸上採苗施設において、K1のカキ殻糸状体で採苗を行った計28枚の養殖網を使用した。試験場所は、例年、葉体短縮被害が多く発生する鈴鹿市地先の漁場を選定した。同程度の葉長まで育苗されたK1と一般品種を令和元年11月27日に張り込みを行い、定期的に生育状況について比較観察を行った。

2) 地先の漁場環境に適応した優良品種の作出

漁場環境に適応した優良品種を作出するための育種素材の収集を目的とし、県内漁場において「高生長」または「低比重耐性（葉体短縮耐性）」を指標として養殖中の葉状体を採集した。採集した葉状体は、1枚ずつ枝付きフラスコで培養を行い、自家受精によってフリー糸状体として保存した。

結果および考察

1 漁場環境適応品種の作出

1) 低比重耐性品種の養殖試験

標準株（U51）およびK1株を殻胞子の段階から塩分30で14日間培養した平均葉長を100とした場合の低比重環境（塩分15）で同期間培養した平均葉長の相対値を図1に示した。このように、培養試験においてK1株には一定の低比重耐性があることが分かっている。

令和元年12月10日に行った調査では、K1と一般品種の生育状況に明らかな差が確認された。一般品種では、例年通り葉体短縮被害が発生していたが、K1の養殖網（全28枚）では良好な生育が確認された（図2）。また、K1を用いた製品の品質は、一般品種を用いた製

品と比べても遜色がなかった（試験に協力した生産者からの聴き取り）。

次年度漁期においては、K1の生長特性を明らかに出来るよう、さらに規模を拡大して養殖試験を実施する必要がある。

2) 地先の漁場環境に適応した優良品種の作出

本事業（平成28年～令和元年）において、育種素材として合計80株を確保し、フリー糸状体として保存を行った。次年度以降は、これまでに収集・保存した株をもとに新たな品種作出にかかる試験研究を実施する計画である。

近年、本県では漁期序盤から中盤にかけて多くの漁場で葉体短縮化の現象が確認されている。この現象について全国では、「食害」が大きく関係していると指摘されているため、今後は、K1の県内普及を目的とした養殖試験の実施と合わせて漁場における食害把握にかかる調査も実施していく必要がある。

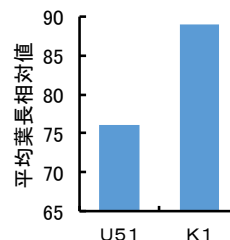


図1. 塩分15で14日間培養した平均葉長相対値



図2. K1の養殖試験開始13日目の様子
（左：K1、右：一般品種）

関連報文

岩出将英(2014)平成26年度三重県水産研究所事業報告.